みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

みんぞく資料をまもるために

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 隆, 三輪, 嘉六, 園田, 直子, 武知, 邦博, 伊達, 仁美, 内田, 俊秀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009068

セッションⅣ

パネルディスカッション

みんぞく資料をまもるために

【コーディネーター】
村上 隆

【パネリスト】
三輪 嘉六／園田 直子／武知 邦博
伊達 仁美／内田 俊秀

村上 隆
京都国立博物館学芸部副部長

1953年京都生まれ。京都大学工学部、同大学院工学研究科修了。東京藝術大学大学院美術研究科修了。学術博士。文化財保存修復学会理事。日本文化財科学会評議員。
石見銀山資料館名誉館長。岡山大学客員教授（自然科学研究科）、立命館大学特別招聘教授（グローバル・イノベーション研究機構）、佐賀大学特命教授（地域学歴史文化研究センター）。
著書に、『金・銀・銅の日本史』（岩波書店、2007）、『日本の美術　443号　金工技術』（至文堂、2003）、『色彩から歴史を読む』（ダイヤモンド社、1999）、『文化財は守れるのか』（編、クバプロ、1999）ほか。
専門は、歴史材料科学、材料技術史、博物館学。
第8回ロレアル国際賞「色の科学と芸術賞金賞」、第1回「石見銀山文化賞」。第4回文化財保存修復学会業績賞。

村 上 本日は、「みんぞく資料をまもる」ということで、それぞれのお立場でお話をしていただきました。ここでご講演いただいた方々にあらためて一堂に会していただき、また違った側面を含めたお話をお伺いできればと思っております。会場からもいくつか質問が寄せられておりますので、時間が許せばそれらにも触れさせていきたいと思っております。

さて、基調講演で、三輪先生から「みんぞく」の資料にどんな意味あいがあるかをお話しいただきました。まず、基調講演のあと、皆様のお話をお伺いになった感想を、三輪先生から簡単に紹介していただくところからパネルディスカッションを始めたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

三 輪 それは本来、最後に総括する話かと思うのですが……。

村 上 軽くイントロダクションとしてお願いできればありがたいのですが。

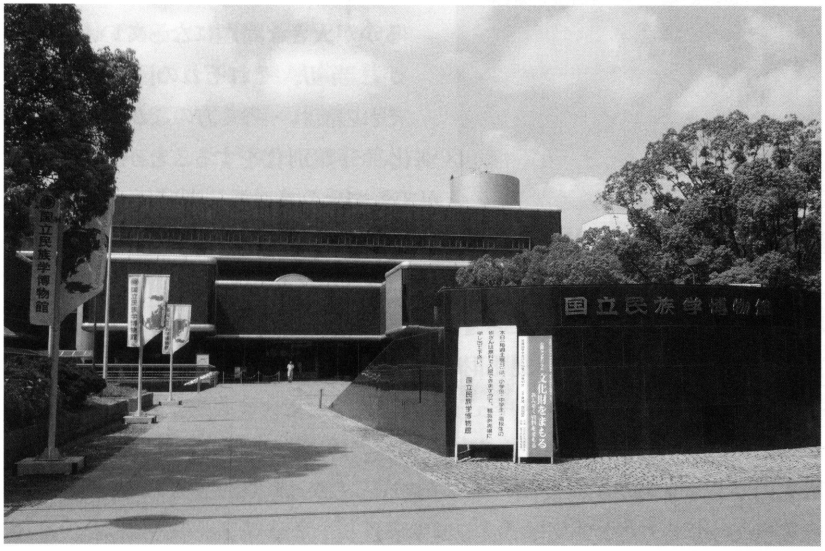
三 輪 ほとんど打ち合わせらしい打ち合わせをしていませんので、生の声でお話しします。本日は6題のご講演がありましたが、みんぞく資料が地域といかに結びついているか、また地域の活性化に結びついていくみんぞく資料の在り方と、それを保存するのにどのような努力が払われているかということがよくわかりました。また、たとえば博物館のようにIPM（総合的有害生物管理）のような手法を資料保存のために適用する一方、まさに伝統を守りながら地域でしっかり昇華していくという両面を持って存在しているといったことを非常に強く感じました。

被災時にみんぞく資料の原点がみえる

村 上 三輪先生のお話にもありましたが、「みんぞく」という言葉で表される資料は、

私どもの日常生活に密接につながっています。それだけに、いわゆる博物館にある文化財や、皆さんが一般的にイメージを持たれるものとは少しニュアンスが違っています。そこで、何をみんぞく文化財と定義づけていくのかということは難しいと思うのですが、内田俊秀先生は災害時の事例をいくつか紹介され、そのなかでいわゆる文化財をレスキューするとき、非常にわかりやすいものという定義をご紹介されました。阪神・淡路大震災（1995年）が一番のきっかけになったのですが、その際、文化財としての定義といいますか、何からレスキューしようかというとき非常に悩んだ経験を私ども文化財保存修復学会としても持っています。そのときの経験を紹介していただけますか。

内田 はい。手短にお話しします。阪神・淡路大震災のとき、何を救い出すかということがずいぶん議論されたのですが、平成19年（2007）に発生した中越沖地震での新潟県柏崎市では、市民から救出してほしいものが続々と寄せられたということで隔世の感がありました。その柏崎の内容をよく調べてみるとさまざまなことがわかってきました。たとえば、「自分が集めたものではなく、お爺さんがしまいこんだものだから捨てられない。なぜこんなものがあるのかよくわからないけど、捨てられないから救出してほしい」とか、両親と私が集めた泥人形のようなものや、研究者が趣味で集めていたといったほうがよいかもしれませんが、「柏崎のかかし・わら人形は他の



地域と違うから救出してほしい」といった声がたくさんと集まってきたのです。

私は、被災したとき、壊れたものをはじめとしていろいろものを捨てる前に、一度、どうして捨てられないのかを精査してほしい、精査すべきだと考えています。この精査によって、非常に大事なもの、それほど大事なものではない、といった判断ができます。このあと、大事でないものは捨ててもよいと考えています。つまり、まず立ち止まって、大事なものと思われるものを救い出すことが、みんぞく文化財にとっては特に重要です。

村上 ありがとうございます。小学校の事例も含めて、おじいちゃんおばあちゃんの代のものを、我々のよりどころとして残していく必要があるとする点に、みんぞく資料の原点みたいなものがあると思います。阪神・淡路大震災のとき、確かに、アルバムや人形など生活に密着したものまでが文化財レスキューの対象になるのかという議論がありました。三輪先生、そのあたりのことで補足していただけませんでしょうか。

三輪 たぶん、文化財のレスキュー、文化財の危機管理は昔から考えなければならない課題でしたが、阪神・淡路（大震災）が非常に大きな原点になりました。そのとき、どこからどこまでをレスキューするかが大きな問題になっていたのですが、当初、それぞれの団体が、それぞれの流れ・考え方のなかで一生懸命活動されていましたが、なかなか区別化、分類別化をすることができなかったため十分にはレスキューすることができませんでした。当時は、自由自在に本当に助けられるものをそれぞれが助けるようにしていたわけです。そこで、私ども文化財保存修復学会（そのころは古文化財研究会）が中心になって、はじめて文化財レスキューを組織的に立ち上げて対応するようにした経緯があります。そこでは、文化財の内容をどこからどこまでということより、要請のあるものはすべてレスキューしていこうと考えました。たとえば、「おじいさんにまつわる思い出がある」、「家族の思い出の深いもの」などさまざまなものがありましたが、要望のあるものをともかくレスキューしていこうという姿勢です。

阪神・淡路大震災からちょうど5年後、台湾集々大地震（1999年）が発生しました。私も現場へいきましたが、この地震では台湾の中部地域は神戸ほど面的な被害はありませんでしたが、台中地域が壊滅的に被害を受け、美術館がいくつも倒壊し、ピカソやダリの作品がグチャグチャになった無惨な状態で建物の下敷きになっておりました。このとき、台湾でレスキューに携わった人たちが我々にいったことは、所蔵者であり家族が助けて欲しいというものをともかく助けようとしたということです。ついつい「重要文化財だから助けよう」、「これは県の指定物件だから助けよう」という思いになりがちです。事実そのような面もありますが、ともかく所蔵者から要望のあったものはレスキューできるならしっかりとレスキューしていこうという姿勢が原則です。

増え続ける近代の資料はどうとらえるべきか

村上 ここで、会場から、「救い出す」という災害時の問題もありますが、日常時でも、文化財としてのみんぞく資料は重要なものであっても無尽蔵に残していくことができないので、どのくらい残していけばよいのですか、という質問がきています。これに関して、伊達先生から一言お願いします。

伊達 その点が、みんぞく文化財が博物館にとってお荷物な部分であるといわれるひとつのゆえんです。しかし、今無尽蔵に残していこうとしている対象の「昔」が、さきほど述べましたが50～60年前ということになると、これから50～60年前はどんどん増えていきます。すでに初代のファミリーコンピュータなどが収蔵資料となっている博物館もあります。実物を残すことがもっとも理想的ですが、それらを残すことができないのなら情報で残す、あらゆる情報をもたせて残すことを考えています。

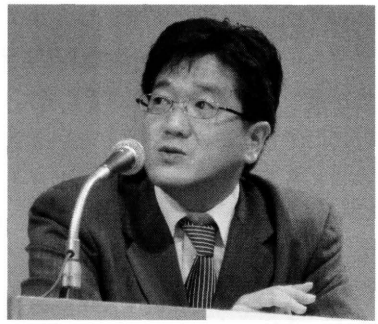
村上 それはなかなか難しいところです。逆に何を捨てていくのかという問題にもかかわってくると思いますが……。これについて、森田恒之先生は講演で、「みんぞく資料をサンプルとして考える」と述べられてお

られました。それはひとつの考え方だと思います。しかし、その時代時代を切り取って、それを標本として系統的に残していくことを考えていくことが重要なのではないか、というご意見が会場から寄せられています。これについてはいかがでしょうか。

三 輪 当然、あらゆる文化財はある時代のひとつのサンプルという捉え方はありえます。特に近代遺産といいますか近代の資料は、みんぞく資料と同じように膨大な数になります。文化財として整理していく必要のあるものと、どこからどこまでが文化財かということを含めて考えていく必要があります。近代という時代のなかで捉える範疇はものすごく広いし、なかでも資料数は膨大なものとなります。そのなかで、何を、どういうかたちでサンプル化していくのかが、これからの非常に大きな課題のひとつだと思います。できれば本来のかたちをしっかり残していきたいのですが、特に近代のものはデザインでも何でもどんどん変化しています。ある機器については1年に3つほど新しいデザインが生まれるといった激しさを持っています。どの部分をサンプルとして捉えるかという学問体系もこれから構築していかなければならないという気がします。

村 上 このあたりは、まだきちんとした資料保存の概念ができていない分野でもありこれからの課題になると思います。これに関して、今日は枚方市の民俗資料館の事例を紹介していただきました。実際に田中家のものに特化した資料と、その地域のみんぞく資料も含めて展示・保存されている立場の武知邦博さんから、資料の保存といった点についてご意見をお聞かせいただけますか。

保管場所の制約をうけ何をどこまで残せるか



武知 伊達先生が、みんぞく資料にとって情報が非常に大事だといわれましたが、私どもの館でもまさにその問題を抱えています。枚方市ではみんぞく資料を4,800点ほど所蔵していますが、資料館オープンの昭和59年前後に集めたものが多くあります。それらは市の一般職員などが急いで集めたものが多いため、情報まで収集できていません。こういったことはよその資料館でもよく聞く話です。なおかつ、極端に資料の状態が悪く、「何の部品なんやろ？」といったものもあります。そのようなものが「文化財といえるんやろか」という面があります。ただし、資料として登録した以上は保存すべきであって、しっかりと協議したうえでないと新しく状態を変更することはできないと思っております。

村上 結局、資料をお預かりしても、収納場所がかなり大きな問題になりますよね。

武知 そうです。しかも、情報のないものが多くなっています。そのため、健全というか今以上に資料館・博物館の活動をよくしていきたいと考えたとき、やはり情報のある資料が欲しい。我々としたら、新たに情報つきの展示に耐えうるよい状態の資料を収集活動していきたいと考えているのですが、すでに収蔵庫がいっぱいで、積極的に収集活動もできないのが現実です。たとえば、すでに収集している資料とほぼ同じものを市民が寄贈したいと申し出られても、お断りしていることがあります。ただし、これまでの収集にないものとか、情報がついている資料は別です。非常に状態のよい資料も、ちょっと別の話になります。選びながら受け入れているのが現状です。気持ちとしては、せっかくのお話だし、将来の研究に少しでも役立つのではないかと考えて、個人的には全部もらいたいのですが、現実的にはそれは許されないところです。

村上 地域性はかなり大事ではないですか。

武知 はい、地域性は大事です。当館の場合だと、ひとつは鋳物が非常にユニークで、専門性を深めていける分野です。でも、他の民俗分野でいうと、特徴的で、珍しいからその地域を表すものではありません。どこにでもある資料であるということが、ひょっとするとその地域の特徴なのかもしれません。よそとあまりかわりがないのもその地域の特徴だとも考えますので、「よそにもあるからうちはいらない」といったことはちょっといいにくいと考えています。

村上 伊達さんの小学校の発表をおもしろく聞かせていただきました。小学校は完全に地域密着型ですが、同じような道具でも地域で違うのですか。

伊達 はい、まったく違います。私はまだ左京区しか調査をしておりませんが、左京区は南北に長く、収蔵資料にはそれらの地域性が如実に現れています。小さな行政区のなかでもそれくらい違うため、これが京都市の民俗文化財、京都府の民俗文化財といった大きなくくりになったとき、その展示施設で展示される資料の地域性はおそらく希薄な状態になります。ですから、みんぞく資料は地域で守ることが非常に重要だと思っています。

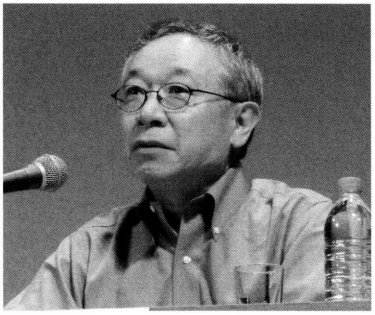
村上 そのなかで、内田さんが述べられたように、震災で学んだというか、すごく強く感じたというか、コミュニティでの心のよりどころみたいな文化財の在り方が、今の話につながると思いますが、どうでしょうか。

内田 私が住んでいる地域にはダンジリがあります。みんなで1トンとか2トンとか重いダンジリをゴロゴロ引っ張るのですが、このダンジリのメンテナンスがすごく大変です。毎年奉加帳みたいなものがまわってきます。そして、たとえば、魚屋の兄ちゃんがある日、世話役になって大きな顔をしてお祭りを取り仕切るというまったく違う顔をみることになります。そして、ダンジリを通して地域の結束ができてきます。いろいろな職業、いろいろな考え方を持った人、新しく来た人、古くから住んでいる人が祭をひとつの媒体として集合してきます。そのことを、迂闊にも震災を通してはじめて知るようになりました。特に神戸のような大きな都会では、住民の無名性が特権です。ところが、水などをみんなで分け合うといったところからだんだん近所とのつながりができてくるということを再認識しました。

村上 重要文化財とか国宝などは文化の象徴性の高いものですが、今ここで議論しているみんぞく資料は、日ごろはあまり目立ちません。

当たり前の日常のなかに埋没しています。いざとなったらそれが心のケアになり、心の潤滑油になるということが、震災などの災害を通してみえてきました。そのようなものを地域と密着してどう残していくかという点に、それぞれの資料館などでも腐心されているのだなと感じました。

内田 はっきりいって、江戸時代の一級の職人さんがつくられた美術工芸品と火鉢を比べて、どっちがすごいかっていったら、感動の具合はまったく違います。「火鉢は火鉢や」っていう感じです。しかし、その火鉢が災害時にすごい力を発揮するっていうのでいいんじゃないでしょうかねえ。



みんぞく資料と虫害からのまもり方－IPM

村上 そうですね。残せるものは何でも残しておきたいと皆考えますが、やはりスペースもかぎられています。資料の収集と収蔵庫などの問題・課題があります。ここまで、みんぞく資料をどう位置づけるかという話をさせていただきました。

ところで、園田さんから、集まってきた資料をどう維持していくかという苦労話をいくつか紹介していただきましたが、それに関連した質問がいくつかきております。ひとつは、「IPMのことに触れられてますが、もう少し具体的な施策がおありでしたら説明していただけませんか」というものです。いかがですか。

園田 IPMとは総合的有害生物管理のことです。そのIPMを重要視している理由は、民族資料と民俗資料の両方に共通していることですが、材質が身近なものであるからです。選び抜かれた材質ではなく、手近にある、たとえば、木や皮革など虫の被害にあいやすい材質です。また、人々の日常生活で使われていたものであるため使用痕があります。それも含めて非常に虫の被害にあいやすい条件がそろっています。さらに、海外でつくられたものを収集しておりますので、保存環境も非常に違います。いわゆる博物館資料には多くのジャンルがありますが、そのなかでももっとも虫害に気を

つける必要があるものがみんぞく資料であるためIPMを重要視しています。

かつては、虫の被害が起これば燻蒸剤や強い薬剤で殺虫処理をしてしまえばよいといった多少安易な考え方があったことは事実です。ただ、オゾン層破壊物質であったフロンと同様、一部の薬剤が使えなくなるなか、最良の方法は、予防的措置、すなわち被害にあう以前の段階から被害が発生しないような環境づくりをすることです。いろいろな殺虫処理方法も開発されていますが、総合的有害生物管理の考え方のもと、予防的措置をとって被害が発生しないようにすることが重要視されています。

村上 ところで、防虫の処理には季節はあるのですか。

園田 民博では1992年（平成4年）ころから生物生息調査を行っており、季節的な傾向をほぼつかんでおります。当然ながら冬は非常に少なく、春先暖かくなって増え、夏に一番多く、秋になると減るというカーブを描きます。したがって、防虫で一番気をつけなければならないのは、春先です。そして、暖かくなると活動が活発になりますので、私たちが注意しているのは春と夏です。ただし、もっともよいことは、異常を早期に発見することです。そのため、季節を問わず注意しています。

村上 管理体制がしっかりすればするほど大変ですよね。収蔵施設などの殺虫についてはどうですか。武知さん、IPM的なことって民俗資料館としては何か対応をされているのでしょうか？

武知 うちの資料館の場合、防虫はなかなかできません。温湿度の管理もできません。そういった設備もない状態です。ただ、虫が入ってくる経路をできるだけ絶つようにしています。たとえば、シャッターの隙間をスポンジのテープでふさいだり、2階が収蔵庫ですので、1階と2階をつなぐ階段にビニールのカーテンを設置するといった工夫をしています。ごくごく簡単なことしかできていません。あとは、虫が発生したらすぐに隔離するといったことぐらいです。

村上 小学校などで民俗資料を並べておられると、IPM的なことは簡単にはできないと思いますが、やっぱり意識されてるのでしょうか。

伊達 資料がある以上は意識をしないといけませんので、小学生に、「ここでお菓子などは食べないようにしましょうね」というレベルでは行っています。「とにかく虫のエサを皆さんで持ち込まないように」という第1段階の対処をしています。

村上 そういう意識を教えつつ、実際の対応はなかなかとりにくいというのが現状なんですね。

伊達 そうですね。

村上 みんぱくには、世界のいろいろな地域から、さまざまな資料が入ってきますよね。それは材質や、それがあった環境も違うため、虫自体に相当特徴があるかと思います。いくら検疫してても いろいろな虫がでてくることはありませんか。

園田 みんぱくの場合、海外からの新着資料に対しては、現在でもガス燻蒸を行っております。そのため、資料に虫がついていたとしても、みんぱくに入る段階でリセットされます。そのため、搬入後に発生する虫害は、日本の虫によることになります。

みんぞく資料は意識的に残す姿勢が重要

村上 答えにくいことまで聞いてすみません。ちょっと疑問に思いましたのでね。

このように、「みんぞく資料」という切り口でいくつかの話題に取り組んできましたが、このみんぞく資料に対して文化財保存修復学会はこれまで積極的にかかわってきませんでした。この点について、皆さんのご意見をお伺いできればと思いますが、いかがでしょうか。

伊達 私はこのようなシンポジウムがあると伺い、みんぞく文化財に文化財保存修復学会が目を向けてくださったことを非常にうれしく思いました。今回は本学会の学会員以外の方も多く参加されていますが、その方々のほうが、みんぞく資料に対して危機感や、どう扱ったらよいのかといった疑問をお持ちだと思います。私は今回、地域でまもるというテーマで報告しましたが、それぞれの資料が地域住民の手によってまもれるものなのか、

それとも専門機関での処置が必要な状態なのかを把握しないと、まもっていけないと思います。闇雲に、みんぞく資料だからといって特別な処置をしなくても残るものと簡単に考えるのではなく、もう少し保存方法などについても学会がアドバイスできるような体制になればよいと思います。

村上 ぜひ民俗関係の方にもこの学会に入っていただいて。

伊達 そうですね。

村上 よろしくお願いいたします。

内田 災害時の救出でいつも思うのですが、みんぞく資料は数が多く、かさばる。そして、農具などは、美術工芸品と比較するとそれほど美しくないと。そのため大変だなあと思います。さきほどから申し上げていますが、廃棄はいつでもできますが、廃棄は2番目でいい。このことについて、東北大学の古文書の救出に出向いている平川先生は、学生に「1,000年もったら全部国宝になる。1,000年もたせなさい」といっておられます。日本のように歴史が非常に長く、高いレベルの文化を持っていて、しかも、ものがたくさん伝えられてきた国は世界的にもあまりありません。

また、民具の資料館では、寄贈の話があってもお断りすることがあるとのことですが、私は非常に恵まれているなあと思いました。そういうところでも、「なんとか自分の代では捨てないぞ」ということが大事です。大量生産品だと1号機は残しますが、後のものはみんな捨ててしまうことがあります。でも全部1号機が残されているわけではけっしてありません。場所を確保しながら残していって欲しいと思います。あとは、保存の専門家にお任せして命を永らえさせていただけないかなと考えています。

村上 武知さん、一言。本シンポジウムで、唯一会員でない方に壇に上がっていただいておりますので、そこも含めて、これまでのディスカッションもあわせてご感想をいただければ……。

武知 我々の仕事は、収集と資料の展示・活用が主ですが、そのなかで保存については、伊達先生や国立民族学博物館の日髙真吾先生とご縁があり、いろいろとアドバイスをいただいて比較的、保存も考えるようになりましたが、どこの博物館・資料館、特に小さな地域資料館の学芸担当

者が保存についての専門知識を持っているわけではありません。そういった館でも実施できる保存についての情報が広がっていけばいいなと思います。

村上 ぜひ学会にも加入していただいて、そのような意見をどんどん学会員としてあげていただければと思います。

園田さん、どうですか。

園田 今日いろいろな方々のお話を聞いていても感じたのですが、私どもも民族学博物館のもっとも大きな特徴は、もともと残そうと思ってつくられたものではない資料を収集・保存していることです。美術工芸品などは最初から残したいという意思があります。制作した側も、それを扱う人間にもすべて残そうということが明らかにわかるものです。一方、みんぞく資料はもともと残そうと考えてつくられたものではありません。そのため、意識的に残していかないと、いつのまにかなくなってしまいます。みんぱくがオープンした当時、もし壊れたら現地にいって買ったほうが簡単だよといわれたことがありました。しかし、30年ぐらいたつと、世界的なグローバリゼーションのなかで現地でももう使われていない、もうつくられていないものも多くなっています。日本の地域のものであれ、世界のものであれ、みんぞく資料の特殊性は、残そうと思わないでつくられたものということになります。また、それらの資料は、民族であったり地域、文化とか人々の生活が一番そこに現れているものを、ものとして切り取ったものであるということで、その重要性がでてくるということを再確認しました。

村上 そうですね。材料も技術も千差万別です。それを保存するというのは意外と大変で奥の深い話だということを改めて今日思いました。今日こうやってパネルディスカッションをやらせていただき、私どもの学会が、みんぞく資料に正面を向いて取り組んでこなかったことを改めて感じました。私自身もなかなか馴染みがなかったので、今日のパネルディスカッションもなんとかここまできたわけですが、これから、みんぞく資料と私どもの学会もいろいろなかたちでつきあっていかないといけないと強く思った次第です。パネリストの先生方、本日はどうもありがとうございました。